



NGA Compo (4,000 Lタイプ)

次世代の有機物リサイクルシステムで地球環境の良質化に貢献し、持続可能な地球をつくる一翼を担う

有害鳥獣最終処理システムの仕様

装置外形	W (mm)	5,000	ヒータ標準仕様 (W)	10,098	
	D (mm)	1,850		排気ファン容量 (W)	760
	H (mm)	2,420		熱風発生装置 (W)	10,000
処理槽	W (mm)	3,000	熱風送風機容量 (W)	1,500	
	D (mm)	1,350	ブレーカ容量標準	150A	
	H (mm)	1,450	一日の処理容量 (目安)	150Kg~160Kg	
モーター	容量	7.5Kw	※機器名称: NGA Compo (4,000 Lタイプ)		
	三相電源	200V			

導入メリット

- ・鳥獣処理処分に掛かる労力費用の低減
- ・土壌汚染の防止
- ・地下水汚染の防止
- ・地球温暖化の防止
- ・減容化、衛生的処理ができる
- ・衛生的で臭気の発生が抑えられる
- ・処理物再利用による循環型農業が行える
- ・補助金（国）の活用ができる

 有限会社 芹澤微生物研究所
〒428-0414 静岡県榛原郡川根本町東藤川1360番地

代表 芹澤 順三郎
事業内容 有機物処理装置製造、有機物収集
TEL 0547-59-3304 FAX 0547-59-2339
MAIL info@serizawa-biken.com
WEB <https://www.serizawa-biken.com/>

販売代理店

株式会社BOD商会
〒708-0013 岡山県津山市二宮1461-1
TEL:090-7508-5065
FAX:0868-28-1438
MAIL:info@bod-co.com
WEB:<http://bod-co.com/>

有害鳥獣 最終処理 システム



自然との共生、
微生物のちから。

 有限会社 芹澤微生物研究所

鳥獣捕獲強化対策とは

環境省・農林水産省による鳥獣数を半減にする目標に取り組む施策

平成 25 年 12 月環境省・農林水産省による鳥獣捕獲強化対策が発表され、10 年後の令和 5 年度の鳥獣数を半減にする目標に取り組む施策があります。この対策に見られるように、全国各地に分布する野生動物の生態は増加の一途をたどり、食糧を求め人里にまで降りてきて、中山間地域に住む住民の耕作物を食い荒らし、私たちの食生活に重大な支障を与えております。また、樹木を餌とすることから自然環境への影響も大きな問題となっているなど、鳥獣野生動物の駆除が緊急に必要とされております。

有害動物処理による環境への影響

従来処理が引き起こす問題や懸念

狩猟者が食糧に捕獲する野生動物の処理後の残渣は、当事者に任せれば良いのですが、駆除目的の捕獲動物の処理は、捕獲した場所の地中に埋めたり、焼却炉で焼いたり、専門業者に処理委託する方法しかありません。このような従来の処理では、狩猟者の体力的な問題、病原菌の発生、水質汚染、焼却 CO₂ の環境問題など、多くの自然破壊につながる要素が懸念されております。

有害動物処理装置とは？

廃棄物が出る焼却処分ではなく、酵素と微生物による働きを利用し、化学的に水とガスに分解して自然に還すことのできる処理装置です。80℃以上の温度で微生物を反応・活性化させることで、近年増加の一途を辿る有害動物の固い外革や剛毛を酸化分解させ、臭気などの発生を最小限に、有機物を極限まで分解することができます。



これまでの導入実績一覧

- ①H26 年 徳島県佐那河内村 (1500 ℓ)
- ②H28 年 岡山県和気町 (2000 ℓ)
- ③H28 年 岡山県備前市 (2000 ℓ)
- ④H29 年 三重県伊賀市 かじか (700 ℓ)
- ⑤H29 年 福島県富岡町 (4000 ℓ)
- ⑥H30 年 広島県大崎上島町 (2000 ℓ)
- ⑦H30 年 静岡県伊豆市 (4000 ℓ)
- ⑧H30 年 福島県富岡町 (4000 ℓ)
- ⑨H30 年 京都府京丹波町 (株)アートキューブ (4000 ℓ)
- ⑩H31 年 兵庫県宍粟市 グリーンキーパー (430 ℓ)
- ⑪H31 年 兵庫県宍粟市 でいあーず (430 ℓ)
- ⑫H31 年 兵庫県淡路市 (430 ℓ)
- ⑬R1 年 京都府宮津市 (4000 ℓ)
- ⑭R2 年 福島県富岡町 (4000 ℓ)
- ⑮R2 年 京都府南丹市 (4000 ℓ) 予定
- ⑯R2 年 静岡県藤枝市 (4000 ℓ) 予定

導入の必要性と導入実績

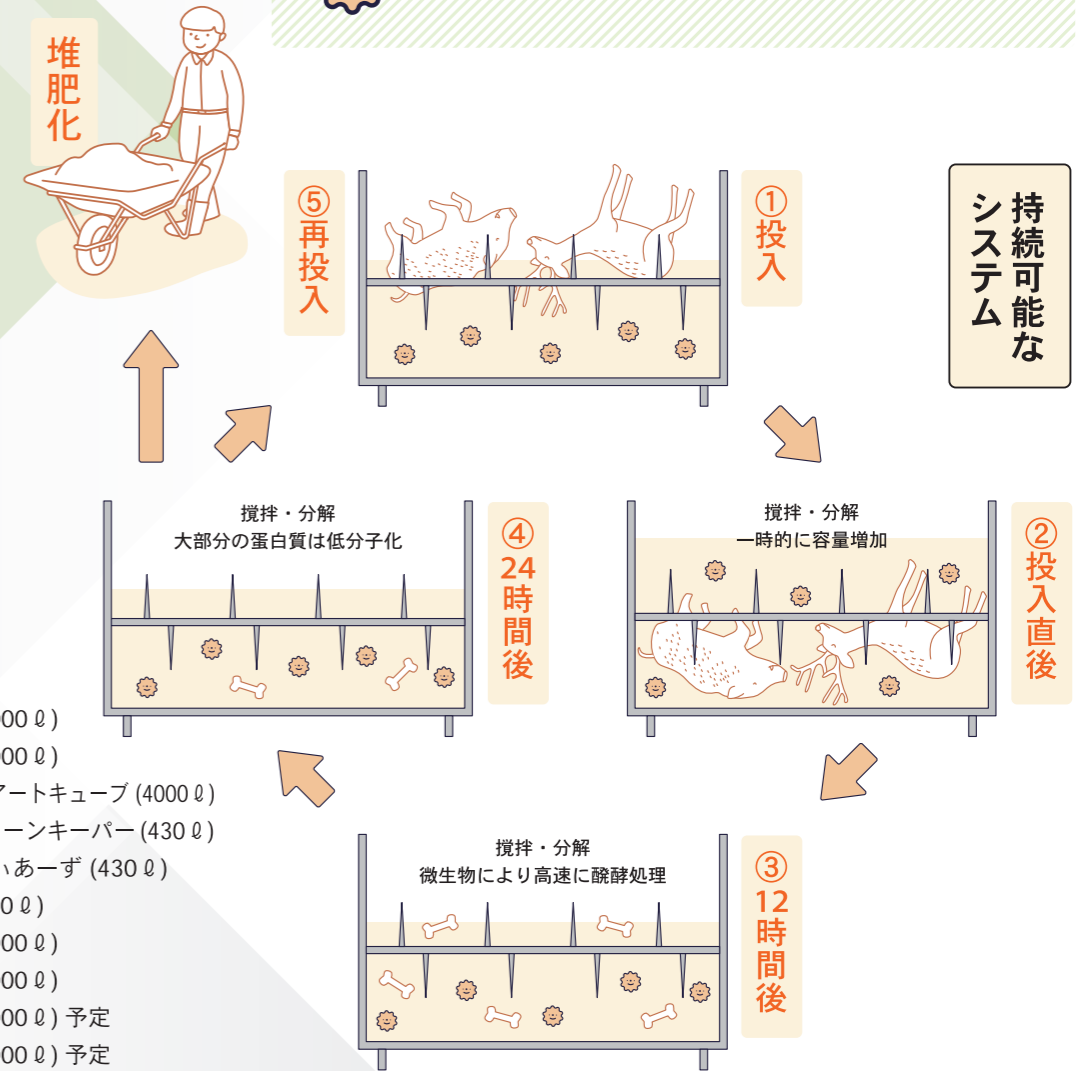
鳥獣野生動物の捕獲活動が進み、捕獲後や食肉加工後の処理において課題が生じている中で、弊社の「有害動物処理装置」など、埋設・焼却以外の新たなバイオ処理技術が採用され始めています。適正に処理をしていくためには、捕獲事業と処理事業が一体となった有害鳥獣捕獲の事業計画の策定が望まれますが、その際に狩猟者や地球環境への過度な負担を軽減し持続可能な計画を作るためには、有機物リサイクルシステムの導入が最も有用と考えられます。

2020 年 11 月現在で、大小様々 14 箇所への導入実績があり、現在も複数箇所から引き合いをいただいている状態です。導入した自治体からは「処理の手間が減り、コストが下がった」と喜びの声をいただいています。処理量に合わせて装置の機種を選択していただけます。

従来処理方法と有害鳥獣最終処理システムの比較

	地中に埋めての処理	ボイラーによる処理	有害鳥獣最終処理システム
狩猟者の労力	極大 (地中に埋める)	小 (搬入のみ)	小 (搬入のみ)
管理者の稼働	極小	極大	小
影響	土壌汚染/地下水汚染 腐敗臭の発生/病原菌の発生 他の野生動物の掘り返し被害 etc...	高ランニングコスト 排煙環境CO ₂ の発生 焼却灰の二次処理の発生 臭気の発生 etc...	処理の利便性・回転性が良い 衛生的で臭気の発生が最小 コンパクト/投入のみ etc...

有害動物処理装置の処理工程



実際の処理の様子はQRコードからご覧ください

